

3. キュウリ褐斑病の効率的な防除法

[要約]

耐病性品種と7日間隔の薬剤散布を組み合わせた防除体系は、慣行品種と3～4日間隔の薬剤防除組合せ体系と同等の防除効果が得られ、省力低コストで効率的な防除ができる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山県の露地栽培のキュウリ産地では、褐斑病が大きな生産阻害要因となっており、効果的な防除体系が求められている。そこで、本病の耐病性品種と薬剤散布を組み合わせて効率的な防除体系を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 耐病性品種「SR22」、「艶香」、「TCU-093」は、慣行品種「Vロード」、「ビュースター」より褐斑病の発生が遅く、耐病性が強い（図1）。ただし、初発後の病勢進展に差は見られない。
2. 慣行品種では7日間隔の薬剤散布に比べて3～4日間隔の薬剤散布で、病勢進展の抑制効果が高い（図2）。これに対し、耐病性品種では7日間隔の薬剤散布で、慣行品種3～4日間隔の薬剤散布と同等の防除効果が得られる。

[成果の活用面・留意点]

1. 殺菌剤散布は、葉の裏側や新しく展開した葉にも必要十分な薬液がかかるよう、丁寧に行う。
2. 産地の栽培に則したブルームレス台木での試験である。
3. 耐性菌の発生を抑制するため、同系統の薬剤の連用は控え、他系統の薬剤とのローテーションを行う。

[具体的データ]

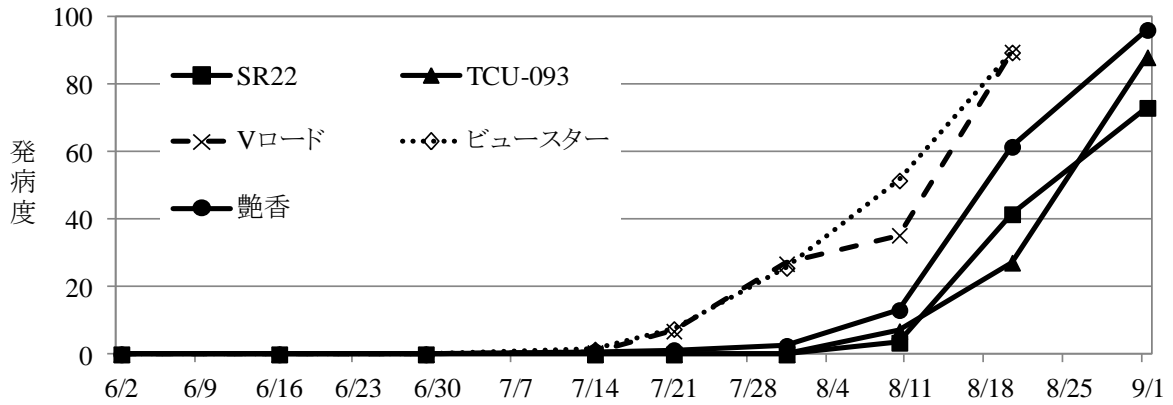


図1 各品種の耐病性(2015年現地調査)

注) 発病程度 A: 発病が認められない
 B: 病斑がわずか(3病斑/葉以下)
 C: 病斑がわずか~葉面積の1/4未満
 D: 病斑が葉面積の1/4~1/2未満
 E: 病斑が葉面積の1/2以上または枯死

$$\text{発病度} = (4E+3D+2C+1B)/(4N:\text{調査葉数}) \times 100$$

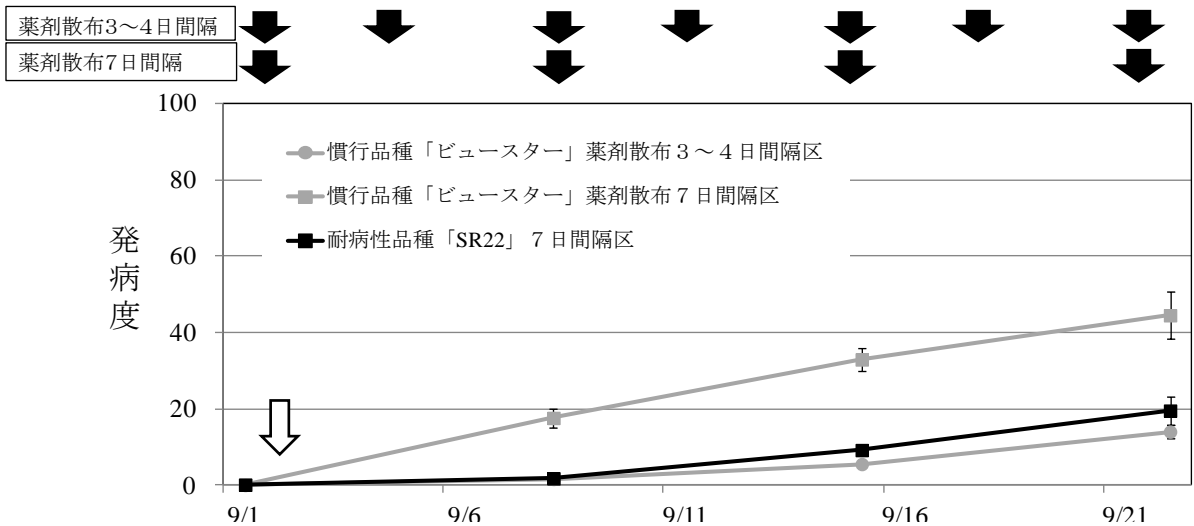


図2 耐病性品種と薬剤散布間隔の組み合わせがキュウリ褐斑病の発病推移に及ぼす影響

注) バーは標準誤差 \blacktriangleright : TPN水和剤散布 \Rightarrow : 接種日
 1区3株 3反復
 1反復当たり任意の100葉について発病を調査し、下記の基準で発病度を算出した。
 発病程度基準 A: 発病が認められない
 B: 病斑がわずか(1病斑/葉以下)
 C: 病斑がわずか~葉面積の1/4未満
 D: 病斑面積の1/4~1/2未満
 E: 病斑面積の1/2以上から枯死

$$\text{発病度} = (4E+3D+2C+1B)/(4N:\text{調査葉数}) \times 100$$

[その他]

研究課題名：キュウリ褐斑病の多発要因の解明による総合防除技術の開発

予算区分：交付金（難防除病害虫防除技術確立事業）

研究期間：2015～2017年度

研究担当者：畔柳泰典